◆ 0 歳児クラス 年間のまとめ（令和 6 年度）

1. 子どもの育ちの姿

本年度は、入園当初の不安定な情緒から始まり、保育者との信頼関係を築きながら徐々に心身ともに安定し、安心して生活や遊びに取り組む姿が多く見られるようになりました。

特に、以下のような育ちが印象的でした：

- 月齢に応じた発達（寝返り、はいはい、つかまり立ち、歩行など）が見られ、自発的な探索活動が広がった。
- 水遊びや戸外活動などの中で、個々のペースで活動を楽しむ姿が見られた。
- 他児との関わりが徐々に増え、玩具の貸し借りや模倣遊びなどの姿も見られた。
- 簡単な言葉での意思表示や身振りでの表現が見られるようになり、自己主張の芽生えが育まれた。

2. 保育者の関わりと支援

- 子どもの体調や発達のペースに合わせた環境構成を意識し、安全で安心できる空間づくりを大切にした。
- トラブル時は仲立ちしながらも、子ども同士のやりとりを見守る姿勢を持ち、社会性の芽生えを丁寧に支えた。
- 水遊びや進級準備の際には個別の特性や不安に寄り添い、無理のない段階的な関わりを意識した。

3. 課題と反省点

- 玩具の取り合いなど、他児との関係でトラブルが頻発する時期があり、場面に応じた環境調整や保育者の介入のタイミングの見直しが必要だった。
- 気温差や体調不良が多く見られる季節において、体調管理や感染症対策をより徹底する必要があった。
- 一部の子どもたちには、環境の変化や進級に対する不安が大きく、早めの段階での移行支援が求められた。

4. 次年度への改善点・展望

- 子ども同士の関わりが活発になる 1 歳児クラスでは、より明確なルールや見通しを持てるような保育環境の工夫が必要。
- 言葉のやりとりが増えてくる発達段階に合わせて、保育者が豊かな語りかけやモデリングを通じて言語発達を促す関わりを強化したい。
- 個々の育ちに合わせた「やってみたい」「できた」の喜びを支えるための活動や関わりの幅を広げていきたい。

令和６年度 １歳児クラス 年間のまとめ

1. 子どもの育ちの姿

年度当初は、進級や入園による環境の変化に戸惑い、場所見知り・人見知りなど不安定な様子が多く見られました。しかし、安心できる保育者との関わりを通じて徐々に心が安定し、安心して園生活を送る姿へと変化していきました。

- 月齢や発達に応じて、言葉や身振りで気持ちを伝えようとする姿が育ち、友だちや保育者との関わりも広がった。
- 好きな遊びやコーナー活動に主体的に向かう姿が見られ、自分なりの楽しみを見つけてじっくり取り組むようになった。
- プール・水遊びや感触遊び、製作など季節の遊びも、子ども一人ひとりのペースで楽しむ様子が多く見られた。
- 簡単な身の回りのこと（衣服の着脱・手洗い・片付け等）を「自分でやってみよう」とする意欲が芽生え、自立への第一歩が育まれた。

2. 保育者の関わりと支援

- クラス編成や環境の変化に応じて、保育者同士の連携を密にしながら、子どもたちが安心して過ごせるよう柔軟に対応した。
- 子どもが興味を持つものを見極め、個々の「やりたい気持ち」に寄り添った保育を大切にした。
- 遊びや生活の場面で「自分でやりたい」気持ちを大切にしながら、必要に応じて手伝うなど、無理なく自立を促した。
- 夏場の活動（水遊び・プール等）では、安全確保のための環境設定や職員間の連携を重視し、安全に楽しめるよう配慮した。

3. 課題と反省点

- クラス体制の変化（3 クラス編成など）や新しい保育者との関係性に対する不安が一部の子どもに見られ、特に年度初めの安定化に時間がかかった。
- 水遊びや感触遊びなどの季節保育の際、一部で十分に遊び込めない様子や苦手意識を持つ子どもも見られた。
- 活動を通じて子ども同士の関係性が深まる一方で、トラブルも見られ、場面ごとの介入のタイミングや援助の仕方に悩むこともあった。

4. 次年度への改善点・展望

- 2 歳児クラスへと進級する子どもたちには、より豊かな言語表現が育つ時期になるため、語りかけや対話的な関わりを意識していきたい。
- 「自分でやりたい」「やってみたい」気持ちを尊重しつつ、失敗や困難も経験できるような安心安全な環境づくりを進めたい。
- 子ども同士の関係性がますます深まる中で、共感的な関わりや葛藤場面への適切な支援を保育者間で共有し、チームとして対応力を高めていく必要がある。
- 活動や生活の見通しがもてるような環境設定・言葉がけ・時間の流れの工夫を継続し、子どもが主体的に動ける環境を整えていきたい。

◆ 令和６年度 ２歳児クラス 年間のまとめ

1. 子どもの育ちの姿

今年度の１歳児クラスでは、初めての集団生活を経験する子どもたちが、保育者や友だちと関わりながら、安心して園での生活を楽しめるようになっていく様子が見られました。

- **新しい環境への適応**
  進級・入園当初は不安定な姿や緊張も見られましたが、保育者との関係が築かれることで徐々に安心し、日々の生活の流れにも慣れていきました。
- **自立への一歩**
  朝の準備や衣服の着脱、手洗い、排泄など、身の回りのことに「自分でやってみよう」とする意欲が育ちました。ときにはうまくいかないこともありましたが、保育者の援助のもとで成功体験を重ねていく姿が印象的でした。
- **友だちとの関わり**
  言葉やしぐさで自分の気持ちを表現し、保育者や友だちとの関係が広がっていきました。「一緒に遊ぼう」と誘ったり、「かして」「いや」など簡単な言葉でやりとりする姿も増えました。
- **遊びを通した成長**
  プール・水遊び・感触遊び・製作など季節の活動に取り組み、自然や素材に触れながら興味関心を広げることができました。戸外遊びでは全身を使って思い切り遊ぶ姿も見られ、体力や運動機能も大きく育ちました。
-

2. 保育者の関わりと工夫

- **子どもの安心感を第一に**
  新しい環境に不安を感じる子どもたちに対し、ひとりひとりの気持ちに寄り添いながら信頼関係を築くことを大切にしました。スキンシップや語りかけ、生活リズムの安定を通して安心感のある環境づくりを行いました。
- **「やってみたい」を支える関わり**
  子どもたちの「自分でやってみたい」という気持ちに応じて、見守りと援助のバランスを取りながら関わることを意識しました。できたことを認めることで、子どもたちの自信にもつながりました。
- **活動の見通しづくり**
  新しい活動や合同保育、クラス移動など環境の変化がある場面では、わかりやすい言葉かけや流れの提示を行い、子どもたちが安心して参加できるよう工夫しました。
-

3. 課題と反省点

- 子ども同士の関わりが深まる中で、玩具の取り合いや言葉のぶつかりなどのトラブルが起きる場面がありました。仲立ちの仕方や子ども同士の気持ちに共感する支援をより丁寧に行う必要があると感じました。
- クラス編成や保育室の移動などの変化に対して、戸惑いや不安を感じる子もおり、保育者間の情報共有と一貫した対応の重要性を再確認しました。

- 日常生活の自立面では、子どもによって発達に差があるため、一斉的な指導にならないよう、個別のペースに合わせた支援をより意識する必要がありました。
-

4. 次年度への改善点・展望

- **言葉のやりとりの充実**
  今後はさらに言語発達が進む時期となるため、語りかけや絵本の読み聞かせ、簡単なやりとり遊びを通じて、言葉で気持ちを伝える力を育てていきたいです。
- **生活習慣の自立を支える環境**
  衣服の着脱や排泄、食事などの生活の中で、自立へ向かう意欲を大切にしながら、成功体験を積み重ねられるような環境と援助を工夫していきたいです。
- **安心できる人間関係と集団の中での育ち**
  子ども同士の関係性がより複雑になる時期だからこそ、トラブルも含めた関わりを経験の一つとしながら、「自分も相手も大切にする」心を育てていきたいと考えています。

📘 令和 6 年度 異年齢保育の振り返り

---

1. 年初の状況とスタート（4 月～5 月）

4 月は新年度を迎えたばかりで、子どもたちは新しいクラスやメンバー、環境に戸惑いながらも、少しずつ関係性を築いていく時期でした。特に年少児にとっては、初めての異年齢保育という中で、年中・年長児の存在が大きな安心材料となっていました。自由保育や園庭遊びでは、自然と他クラスの子と関わり合う姿が見られ、少しずつ“異年齢のチーム”としてのまとまりが生まれていったのが印象的です。
5 月に入ると、年上の子が年下の子に手を差し伸べる場面が増え、関わりの中に“育ち合い”の兆しが見られるようになりました。一方で、集団としての動きはまだゆったりとしたもので、メリハリや切り替えに課題があることが自己評価に記されています。保育者は、一人ひとりのペースを尊重しながらも、集団としての動きのリズムづくりに注力する姿がありました。

---

2. 異年齢の関わりの深化（6 月～10 月）

この期間は、関係性が深まり、子どもたちが“異年齢のチーム”としての自覚をもって動くようになってきた時期でした。特に 6 月～7 月には、「まつりごっこ」や制作活動を通して、年上の子が自然にリーダーシップを発揮し、年下の子を導く姿が日常的に見られました。
9 月・10 月は運動会などの行事に向けた準備と活動が中心となり、異年齢での協力や“役割意識”がより明確になっていきました。例えば、応援グッズの製作や演技の練習を通して、年中・年長児が主体的に動き、年少児の手本となる姿が多く見られました。
この時期の自己評価からは、「異年齢であること」が関わりの広がりや自信の芽生えにつながっていたこと、そして保育者が“お手本”を一方的に提示するのではなく、子ども同士の学び合いの構造を意識的に育てていたことがうかがえます。

---

3. 自主性と自己発揮の広がり（11 月～1 月）

11 月以降、子どもたちの“やってみたい”という気持ちが、より具体的な活動として表れてきます。わくわく保育や日常の遊びの中で、素材を活かした表現遊びや友だちと協力した遊びが多く見られ、保育者が「素材を置く」ことによって広がる遊びの創造性が実感されました。
また、発表会などの行事を通して、自分の出番に責任をもつ、自信をもって表現するという経験が子どもたちにとって大きな成長のきっかけとなった様子が記されています。
年長児だけでなく、年中・年少児にもそれぞれ「自分にできること」「やってみたいこと」が芽生え、それをクラスやチームの中で発揮していく姿が印象的でした。保育者は、過干渉にならず、“見守る・引き出す・支える”というバランスを意識して関わっていました。

---

4. 年度末のまとめと進級意識（2 月～）

2 月になると、進級・就学に向けての心の準備が、日々の会話や活動の中に自然に表れるようになります。特に年中児は、「次は自分たちが年長さんになるんだ！」という気持ちを抱きながら、年長児を見つめ、真似しながら自分たちの在り方を模索する時期です。
節分をテーマにした活動では、遊びを通して自分の感情を表現したり、相手の気持ちを意識したりする

など、関わり方の“質”が深まっていたのも特徴です。お別れ会などに向けての活動を通して、「みんなのために」「仲間のために」という意識が高まり、異年齢の仲間関係が“思いやり”へとつながっていく過程がよく見えました。

---

5. 保育者の支援と気づき

保育者の関わり方は、年間を通して「子どもたちの主体性を尊重する」「見守りながら適切に援助する」ことが軸になっていました。特に異年齢保育においては、一人の子どもに対して“誰が・どのように支えるか”をチームで意識しながら共有していたことが、子どもたちの安心感につながっていたといえます。また、異年齢ならではの関係性（憧れ・模倣・支援）を活かした遊びの設計や声かけは、保育者にとっても試行錯誤の連続だったものの、大きな手応えと学びがあったことが各月の評価から読み取れました。

---

6. 来年度に向けた提案・課題

- 保育者間の連携強化： 特に異年齢での活動では、保育者間の事前共有や当日の臨機応変な対応が欠かせないため、「クラスを超えた協働体制」のさらなる強化が必要です。
- 年齢や個性に応じた関わり： 一律の対応ではなく、発達段階や個性に応じた柔軟な保育を、異年齢という形の中でどう実現するか。これが来年度のカギになります。
- 活動の記録と共有： 成長のプロセスやエピソードを、写真やコメントで可視化し、職員間だけでなく保護者との共有にも活用したいという声も見られました。

🌟【全体まとめ】令和 6 年度 異年齢保育の意義と成果

令和 6 年度の異年齢保育では、「子ども同士の関わりの中で育ち合う」という本質が、日々の生活や行事、遊びの中で丁寧に実践されてきました。

特に、年長児のリーダーシップ、年中児の模倣からの主体性、年少児の安心感とチャレンジ意欲が、それぞれの年齢で自然と育まれていたことは、異年齢保育ならではの大きな成果です。

保育者もまた、子どもたちの育ちから多くの学びを得ながら、チームとしての力を活かして保育を支えてきました。この積み重ねが、「自分で考え、仲間と関わり、挑戦する力」という、未来につながる力を子どもたちの中に育ててくれたと思います。

来年度も、「すべては子どもたちの笑顔のために」という理念のもと、子どもたちの“やってみたい！”を軸に据えた異年齢保育を、さらに深めていきましょう。

令和６年度 全クラス 年間のまとめ

～子どもたち一人ひとりの育ちと、共に支え合う保育のかたち～

1. 子どもの育ちの姿

認定こども園教育・保育要領においては、「養護と教育の一体的な展開」が求められています。本年度は、0歳から異年齢まで、年齢や発達の段階に応じて“安心感のある生活”を基盤にしながら、心身の調和的発達や人との関わりが豊かに広がる姿が随所に見られました。

- 0歳児では、身体の発達に伴う自発的な探索行動が広がり、情緒の安定とともに保育者への愛着関係が育まれました。これは「安定した生活環境の中で信頼感を育む」という要領の視点に合致します。
- 1歳児では、「自分でやりたい」という気持ちを表現する姿が顕著となり、言語や非言語の手段で人と関わろうとする力が伸びました。
- 2歳児では、簡単なルールの理解や自己主張と折り合いの経験を通して、集団生活への適応や社会性が育ってきました。
- 異年齢保育では、年長児が年少児を支える場面や、模倣・あこがれを通した学び合いが見られ、「発達の連続性・相互作用」の観点からも大きな意義を持った実践が展開されました。

全年齢に共通して、「安心できる人との関係」「主体的な遊びや生活」「仲間との関わり」を通じて、子どもたちは自ら育とうとする力を日々発揮していました。

2. 保育者の関わりと支援

保育者の役割として要領で強調されているのは、「子どもの主体的な活動を支える援助的関わり」と「環境構成における配慮」です。本年度の実践では、年齢に応じた“見守り”と“援助”のバランス、また子どもが自ら関わりたくなる“環境のしかけ”が効果的に機能していました。

- 保育者は、特に0・1歳児の段階で、生活リズムや体調管理を丁寧に行い、子どもの不安に寄り添う姿勢を大切にしていました。これは「養護に基づく安定的な人間関係の保障」の一環といえます。
- 「やってみたい」に応じて援助の手を引いたり差し伸べたりする関わりは、1・2歳児を中心に各年齢で見られ、保育者の関わりが「自己肯定感」や「有能感」の形成に貢献していました。
- 異年齢の場面では、保育者同士のチームとしての支援や、子ども同士の育ち合いを促す“間”のとり方が印象的でした。

一人ひとりの子どもにとって“安心できる人”であることを軸に、発達や興味に応じた環境と関わりを丁寧に編み上げる保育が展開されました。

3. 課題と反省点

教育・保育要領では、「集団の中の個」「一人ひとりの違いを受け止める保育の重要性」が繰り返し語られます。今年度は、集団のダイナミズムと個の多様性との間での調整が必要となる場面も多くありました。

- 環境の変化（進級・クラス移動など）に対する不安を抱える子どもには、より段階的・継続的な支援が必要だったと振り返られます。
- 自立の芽生えや関係性の深まりとともに、玩具の取り合い、言葉での衝突などの葛藤も見られ、保育者の介入の質やタイミングが問われる場面が増加しました。
- 異年齢保育においては、「クラスを超えたチーム体制」がより一層求められ、保育者間の連携の在り方が課題として挙げられました。

子どもの主体性が伸びるほどに、それに伴う“ぶつかり”や“揺らぎ”も生じやすくなります。それらを発達上の自然なプロセスと捉え、保育者が柔軟に受けとめて支援できる体制づくりが、今後さらに求められます。

4. 次年度への改善点・展望

「自己を発揮しながら他者と関わる」「自立に向かう力を育てる」という保育のねらいをもとに、次年度に向けた展望を以下のように描きます。

- 言語発達の促進に向けては、語りかけや絵本、対話的な遊びの中で、「言葉で気持ちを伝える力」を育む機会をさらに増やしていきたい。
- 自分でやってみようとする気持ちを尊重しつつ、“安心して失敗できる環境”を整えることで、挑戦と成功体験の積み重ねを支えていく。
- 異年齢の関係性を深める中で、“助け合い・思いやり・憧れ”といった感情を自然に育む機会を計画的に取り入れ、異年齢保育をさらに価値ある実践として確立していきたい。
- 保育者間の共通理解と連携を強化し、「子ども理解とチーム力に基づく保育」の質をさらに高める。

子どもたちの育ちの軌跡をたどりながら、私たち保育者自身もまた学び続け、よりよい環境と関わりを模索する１年でした。次年度も、「すべては子どもたちの笑顔のために」という理念のもと、一人ひとりの育ちを丁寧に支えていきたいと考えています。